

里山
／水と暮らし

大岩 剛一・大原 歩

Title :

Satoyama: The Interrelationship of People and Water

Summary :

This is a report of field research carried out in the Hirao area of Ogi, Shiga, regarding the relationship of the area's inhabitants with water in their daily lives, and centered around the themes of "terraced fields" and "farm houses".

大岩 剛一・大原 歩

* (第二章 二／三／大原担当)

第一章 調査の目的

里山は、人と自然が共生するための持続可能でエコロジカルな環境モデルである。そこには、私たちの暮らす効率的な社会とは異なる時間が今なお流れている。自然界をおおう時間と、モノや暮らしを取り巻く時間。生命にとつての時間と、死者にとつての時間。里山のコスモロジー（宇宙像）は、これら地層のように堆積した時の上に、すなわち現在という時間と空間の中にさまざまなかたちで見出すことが可能だ。本研究は、滋賀県大津市仰木の里山を、自然環境・生活・信仰の諸相によつて構成された「水のコミュニティ」としてとらえ、人と自然の有機的なつながりと、それを支えるコスモロジーを浮き彫りにすることを目的としている（註1）。

なお本研究は、成安造形大学附属近江学研究所における二〇一〇年度近江学研究「里山く水と暮らし」の第一期「水系からみる集落の空間構成・景観要素に関する研究と聞き取り調査―大津市仰木地区―」の成果を、「仰木平尾地区における棚田の水循環システムに関する調査と研究」、及び「仰木平尾地区・

西村家における住居と聖域に関する調査と研究」としてまとめたものである。また本調査は、本学学生二〇名を対象とした通年の授業、「プロジェクト演習A1」（テーマ：里山・水と暮らし）としても行った。

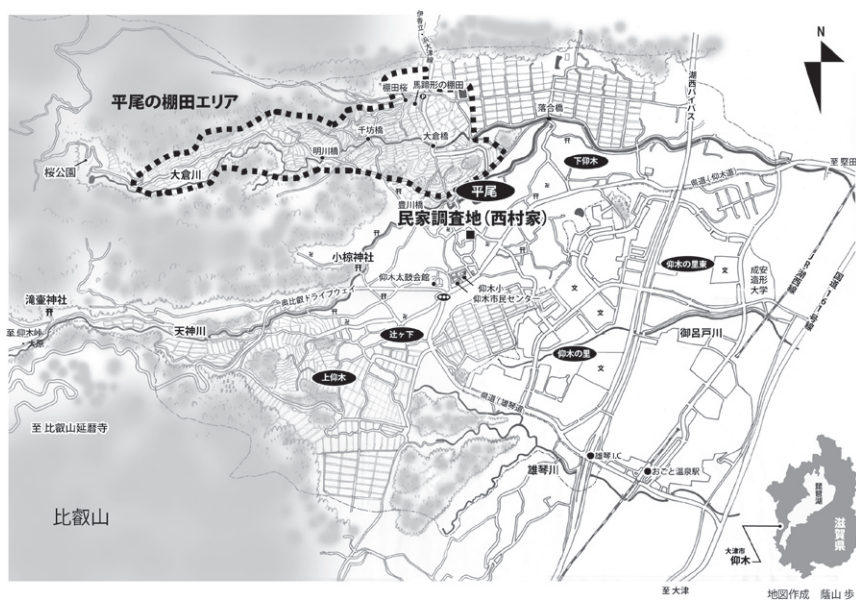


図 1 : 仰木全体地図

〔註1〕 仰木：大津市北部、比叡山から琵琶湖の西岸へと伸びる雄大な山麓の中間に位置する仰木は、階段状の棚田が取り巻く、世帯数七九五戸、人口二二三七二人、四つの字から成る大きな農村集落だ。仰木の集落形成の歴史は約一〇〇年前に遡ると言われ、大津と北陸を結ぶ西近江路(国道161号線)から西へ分岐し、京都の大原で若狭街道、いわゆる鯖街道と合流する仰木道の途中に発達した。集落には、小原神社を筆頭とする多くの社寺、無数の地蔵や祠、共同墓場が点在し、東塔、西塔と並ぶ比叡山三塔のひとつ、横川への登り口に当たる。

第二章 仰木平尾地区における棚田の

水循環システムに関する調査と研究

二一 概要

近年、仰木も他の農村同様、^{ほじょう}圃場整備や道路工事等の開発によって大きく姿を変えつつあり、住民の意識や暮らしにもさまざまな変化が見られるようになった。仰木の集落は、上仰木・辻ヶ下・平尾・下仰木の四つの字によって構成されるが、中でも平尾地区の集落の外縁部には、いまだ圃場整備の手が届かない、自然の地形を利用した棚田が数多く残る。

この棚田の北縁の山裾を、全長一・五キロメートルの幅の狭い人口の用水路が流れている。この用水路は「北山水路」と呼ばれ、平尾地区に大小十本ある用水路の中で最も長いものである。本調査では、北山水路の源流に当たる大倉川の取水口から下流までを歩いて辿り、用水路の水をそれぞれの棚田に行き渡らせるための仕組と、水の管理運営の実態を明らかにする。

調査協力（敬称略）

・地元住民…西村義一（里山・棚田守り人の会顧問）、廣岡太平衛（仰木学区自治連合会副会長）、堀井登夫（前平尾自治会長）、中川眞、中川峯一、辻晋一、北村敏信（酒店経営）
・研究者…山本早苗（富士常葉大学社会環境学部講師、専門…環境社会学）

二一 井堰と水の循環システム

仰木は東西に細長い集落である。比叡山麓から湧き出て東の琵琶湖へと注ぐ、天神川と雄琴川という二本の川に挟まれた尾根伝いに発達したためだ。尾根の高所を流れる天神川から取り出された水は、井堰と呼ばれる用水路をゆるやかに流れながら途中に設けられた分水口から次々と低い田に落ちて棚田全域を潤し、残った水は溜池や、かつては集落内の各家庭にも引き込まれていた。

北山水路は、比叡山麓の湧水である大倉川水系（天神川上流に注ぐ支流）から分岐させた人工の用水路で、本井堰と呼ばれている。北山水路には、その途中にいくつもの分水口が設けられていて、必要に応じて開閉したり水量調節したりしながら、それぞれ持ち主の異なる田に水を落とすことができるようになっていく。

分水口のメカニズムは、素材で多彩だ。水路の側壁にはあらかじめ小さな穴が開けられていて、水はそこから自動的に下の田へ流れ落ちる仕組みになっている。しかし、高所から勢よく流れてくる水や下の田に落とす水の量を調節したり、堰き止めたりする必要から、丸太の切れ端や土囊、石、堰板、ペットボトル、雑草等を穴に詰めたり、ゆるめたりしながらコントロールしている。また水路から離れた田に水を運ぶ時には、小井堰と呼ばれる短い補助の水路を設けて田とつなぐ。長い樋を土手の上に渡したり、土手の土中に埋めたりして水を運んでいると

ころもあった。

大倉川を源流とする本井堰の水は、主要地方道である伊香立
浜大津線の手前で棚田への供給をすべて終え、最後は大倉川に
還っていく。また本井堰の残り水は、道路を越え、平尾の東端
の溜池に落ちて終わる。平尾の棚田総面積六〇ヘクタールのう
ち、北山水路の水だけで、なんとその二分の一に相当する約
三五ヘクタールもの田の水をまかなっているのである。

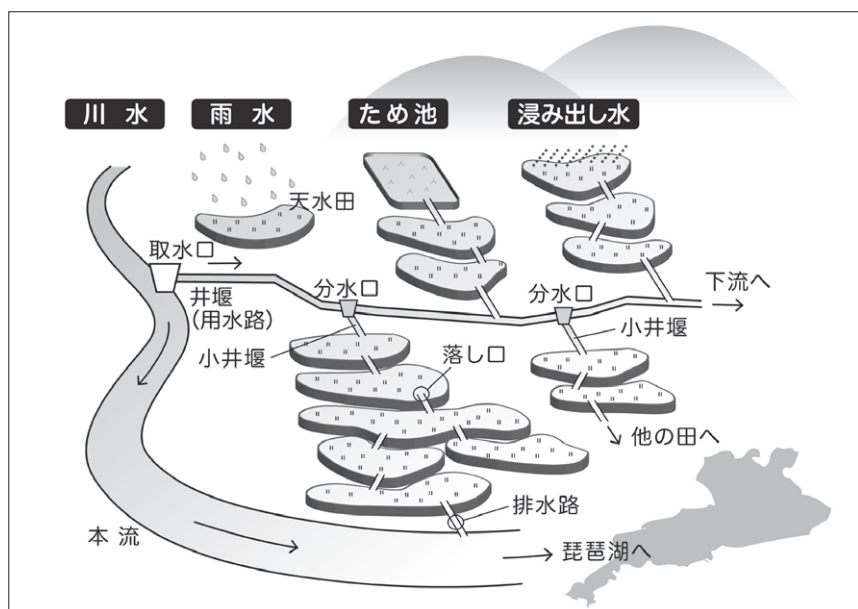


図2：棚田水利システム図

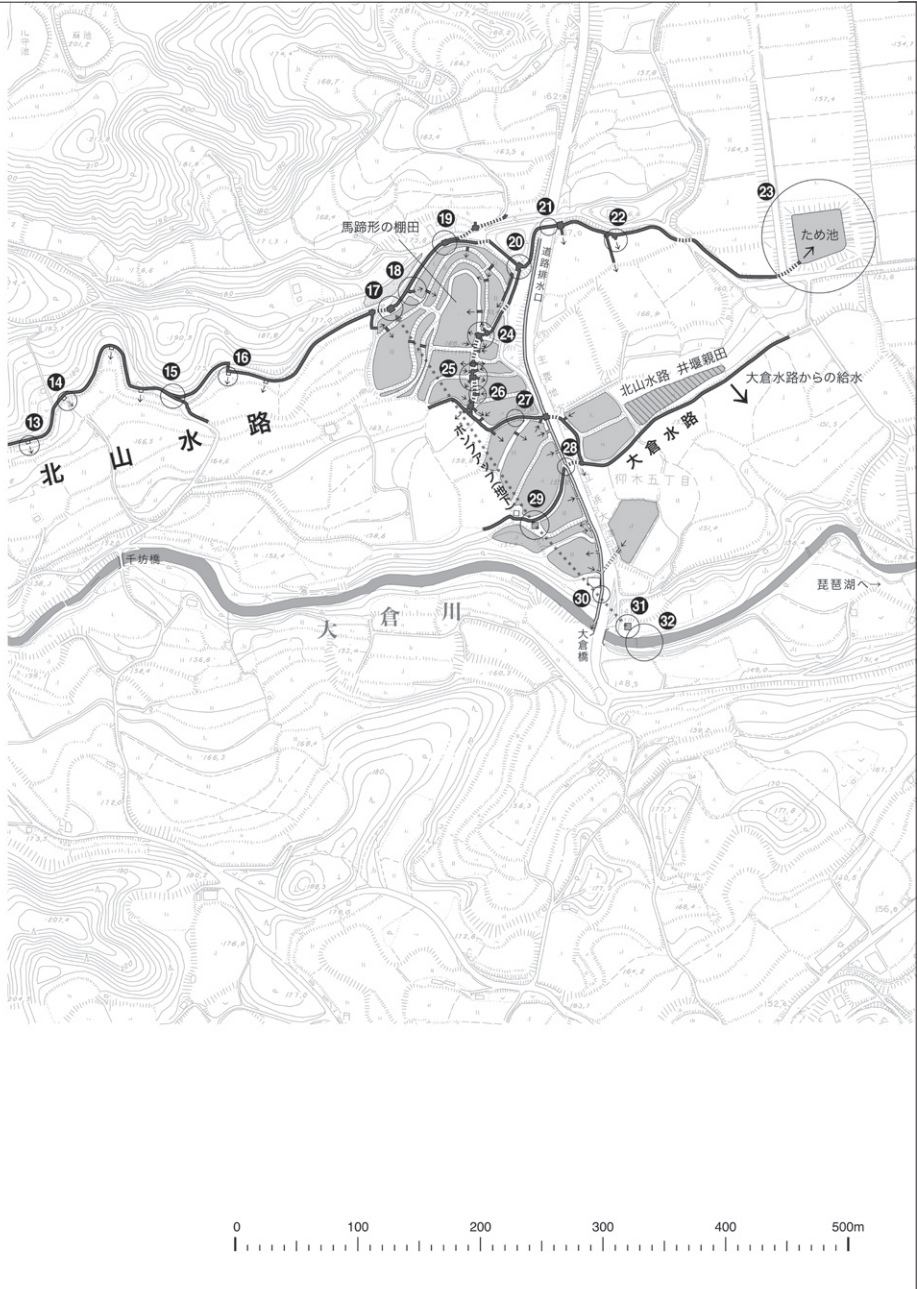


図3：北山水路と棚田の配水システム





02／大倉川の崖の途中を流れる北山水路



01／大倉川の取水口。北山水路（写真右・井堰）
はここからはじまる



04／水路から離れた田んぼに長い樋を渡して配
水する



03／高所から引かれた小井堰と北山水路の合流
点。上からの水量が多い時はここで調節し
て大倉川に戻す



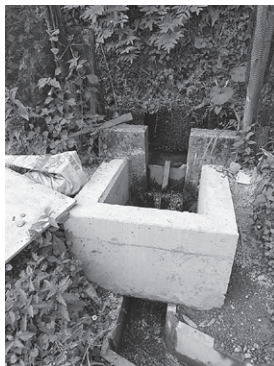
06／丸太による水量調節



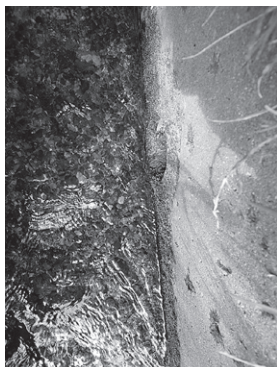
05／丸太の隙間に雑草を詰めて水量調節。水は
下の田へ落ちないで直進する



08／土手にパイプを通し、山手の田の水を北山水路（写真右下）に落とす



07／下の田へ送る水の量を調節する分水口とコンクリート樹



10／下の田へ水を落とす分水口



09／山手の田の水を直接土手の上に流して北山水路（写真下）に落とす



12／分水口（写真左）をふさぐ石



11／水を堰き止め、水嵩を増やしたい時に使う石が近くに用意されている



14／丸太の木切れを詰めて分水口をふさぐ



13／ペットボトルでふさぎ、流れを直進させる



16／丸太の太さを調節して隙間を作り、配水量を加減している



15／小井堰への分岐点に設けられた板。下の田に落とす水量を調節



18



17／ここから先は北山水路の終点に近く、田への配水量の不足を補うために大倉川からポンプで揚水して補給している



20／北山水路と下の田へ水を落とす小井堰との分岐点



19／北山水路(写真中央)と小井堰(右)の分岐点。
閉じる時は土囊を積む



22



21／県道の上に渡したパイプの中を流れる北山水路



24／それぞれに異なる田の高低差。分水口の高さもまちまち



23／北山水路の残り水はため池に集められる



26／田の畦に作られた暗渠の分水口。オーバーフローした水が自然に落ちる



25／土手にパイプを通し、下の田へ水を落とす



28／大倉水路の上を流れる県道脇の雨水側溝に、一番低い田の「ほかし水」が合流する



27／上の田の土手から浸み出た水を受け、下の田に配水するための水路



30／棚田を通過した最後の「ほかし水」を大倉川に戻す排水路



29／給水ポンプ場から送られてきた水を貯めるポンプ貯水場。ここから北山水路に揚水する



32／大倉川にもどった棚田の水



31／大倉川から水を引く吸水ポンプ場

二二三 水の管理運営システム（井堰親制度と番水制^{ばんすいせい}）

棚田にとって一番重要なことは、各田への水の給水である。

仰木では、自然環境に適した仰木独自の水利組織である「井堰親制度」が採用されている。井堰親とは、水路から各田への水の配分の決定や、井堰の取水口・分水口の開閉を行う権利、および水路の点検・管理の義務や他の井堰組織との連絡調整など、水の管理運営とその決定に関わる重要な役割を担う。

仰木の独自性は、井堰親が所有している田（井堰親田）の位置にみることができる。一般的には井堰に最も近い最上段の田を井堰親田とすることが多いが、仰木では井堰から最も離れた最下段の田を井堰親田としている。水量が減るなど、給水が難しい一番低い位置にある田の持ち主を井堰親と決めることで、水の配分の平等性に配慮した民主的な管理運営システムとなっているのがわかる。

井堰親制度の水の分配システムとしては、北山水路に見られる夏の「番水制度」がある。夏は山の水が減るため、予測される水不足に対し、水を使う田の数や、田への水入れの時間を制限しているのだ。北山水路の場合は、全長一・五キロメートルある水路を四分割し、分水口を開口する水入れ時間に制限を設けている。源流に近い上流から下流に向かって順に、午前八時から午前十時までの二時間、午前十時から午後二時までの四時間、午後二時から午後八時までの六時間、午後八時から午前六時までの十時間と決めている。しかも下流に行くにつれ、時間

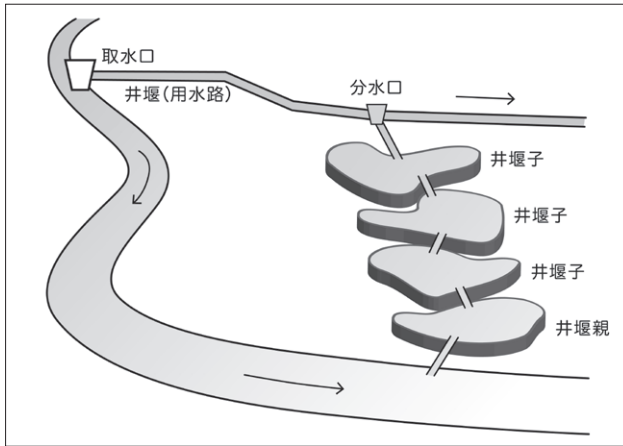


図4：平尾地区における棚田の井堰親制度概念図

が長くとられているのがわかる。上流から遠く離れた下流では、水の勢いが落ち、水量も減るからだ。番水の水入れの際には、井堰子は全戸から参加し、井堰親の確認を受ける。
 細分化された棚田の一枚一枚に水を行き届かせる小井堰と、水の管理運営システムには、先人のたゆまない自然との対峙から生まれた知恵が詰まっている。
 (大原歩)

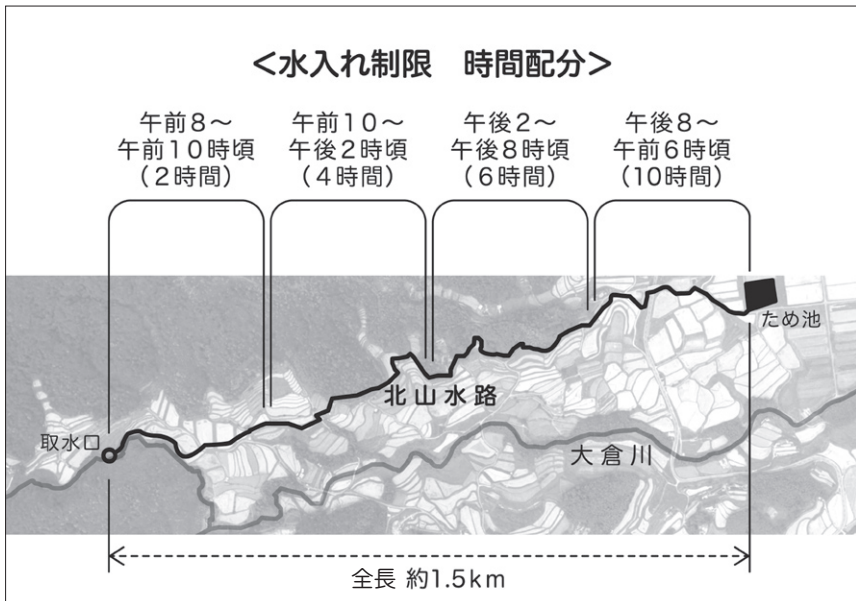


図5：北山水路における水の分配システム（番水制）

※水入れの時間配分は年によって異なる場合あり。

参考文献・

- ・山本早苗、「土地改良事業による水利組織の変容と再編」滋賀県大津市仰木地区の井堰親制度を事例として」、『環境社会学研究九』、頁一八五～二〇一（二〇〇三年）
- ・山本早苗、「人為的自然の限界で暮らす人びとの生活実践」滋賀県大津市仰木町の里山・棚田利用」、『平成十四年～十六年度科学研究費補助金研究成果報告書「環境保全におけるローカルな知の伝承に関する研究」』、頁三七～七十三（二〇〇五年）

二四 結び

神体である聖なる山から湧き出た水は、いわば神の体液である。稲を実らせ、自らの身体に取り込まれるこの聖なる水は、里山という遠大な時空の中であらゆる生命と豊かな精神文化をはぐくんできた。地中に浸み込んだ雨水が森を豊かにし、一筋の川となつて琵琶湖に注ぐ。湿気をたつぷり含んだ水蒸気は、雨雲を呼び、再び里山に恵みの雨をもたらす。ここでは、自然界の循環と人々の宇宙観とがそっくり重なっているのである。

北山水路は、比叡山麓の湧水を水源とする大倉川の上流から分岐させている。ひとつの田から溢れた水がそのすぐ下の田に、そして、すべての田を順番に通過した水が本流の大倉川に戻り、はるか下流の琵琶湖へと流れ込んでいる。

比叡山と琵琶湖を結ぶスケールの大きな水路網計画。素朴で合理的な井堰のシステムと、水を民主的に分配し、通わせるための管理運営システム。今日の仰木の里山の風景を支えているのは、二千枚とも言われる棚田に水を運び、行き渡らせる、そ

うした昔からの豊かな知恵である。そして、井堰や田はもちろん、川も琵琶湖も汚さない村人の細心の配慮であり、命の水を守る心なのである。ここには、水と暮らしが有機的に結びついた水のコミュニティが、今も生き続けているのだ。

二五 研究の成果

(一) 本学の地域連携推進室が取り組んでいる大津市都市計画課主催「仰木地区活性化モデル検討会議」に、調査メンバーの学生四名が参加。

(二) 仰木学区文化祭において、今回実施した棚田水利調査報告に関するパネル展示を行った。（主催・仰木学区文化協会、二〇一〇年十一月一日～三日、大津市立仰木太鼓会館）

(三) 「平成二十三年度 仰木人権教育研究会」における講演と活動報告（主催・仰木人権教育研究会、二〇一一年六月二九日、成安造形大学生涯学習センター）

1. 基調講演「里山と棚田」（大岩剛一）

2. 平成二十二年度近江学里山研究「里山と水と暮らし」活動報告（大岩剛一）

3. 仰木棚田における管理と仕組（大原歩）

(四) 二〇一〇年八月十四日付「京都新聞」朝刊、関西広域ニューズ欄に、「棚田の水路 マップに」大津市仰木／取水や分水／先人の知恵いっぱい／成安造形大学生ら歩いて調査」の見出しで掲載される。

第三章 仰木平尾地区・西村家における

住居と聖域に関する調査と研究

三一 概要

「第二章 仰木平尾地区における棚田の水循環システムに関する調査と研究」で調査した平尾地区棚田エリアのひとつ、通称「馬蹄形の棚田」の持ち主である西村貞子氏に協力をいただき、氏の自宅を調査した。調査地は比良山系を望む、比較的平坦な仰木平尾地区の中心部に当たり、築一〇〇年以上（明治後半）の母屋と土蔵、農具小屋、増築された離れが、広い屋敷地にコンパクトに配置されている。母屋の前には土地の傾斜を利用した築山庭園があり、東側の前面道路からゆるやかなスロープを下って母屋の正面に至る。スロープの両側には自給のための菜園が広がる。

屋敷地と民家の実測、及び家主への聞き取りに基づいて図面を作製し、調査時点における屋敷地内の水利用と植生、信仰のそれぞれを図面上にプロットした。この研究は、調査対象である三つの「記憶のかたち」から、住居におけるコスモロジー（宇宙像）の輪郭を浮き彫りにする試みである。

調査協力（敬称略）

・西村貞子（家主）、西村義一（里山・棚田守り人の会顧問）、中川峯一（家主親類）、堀井登夫（前平尾自治会長）



西村家の畑から母屋を望む



土蔵



母屋正面の玄関と縁台



農具小屋



中央が西村貞子氏

三二一 水利用 三二二 溜池

仰木の集落は比叡山麓に抱かれてはいるが、尾根ひとつ隔てたそのすぐ向こうは京都の大原である。したがって周囲の山には奥行がなく、昔から暮らしに必要な水の絶対量が常に少ない地域だった。そのために渇水がひどく、水争いが多発し、村単位、家単位での雨乞いは欠かせない儀礼だった。（毎年五月三日に催される仰木祭は別名泥田祭とも呼ばれ、雨乞いの祭りでもあった）。

かつては西村家の屋敷内にも天水を溜めておく三つの溜池があり、中でも道路脇にあった二つの大きな溜池は近所の家と共同で利用し、畑の水やりや野菜の泥落としに使っていたようだ。今では前面の車道の拡幅工事で小さくなった溜池が、入口脇に一つ残るだけである。

天水はすぐに干上がる。昔は溜池が枯れると、二・六キロも離れた山の湧水（現桜公園）まで水を汲みに行ったという。その後浄水場から簡易水道を引き、砂でろ過した水を使用した時期もあるが、やがて上水道が



道路脇の天水のため池（畑の水やり、野菜の土洗い用）（図6-B）

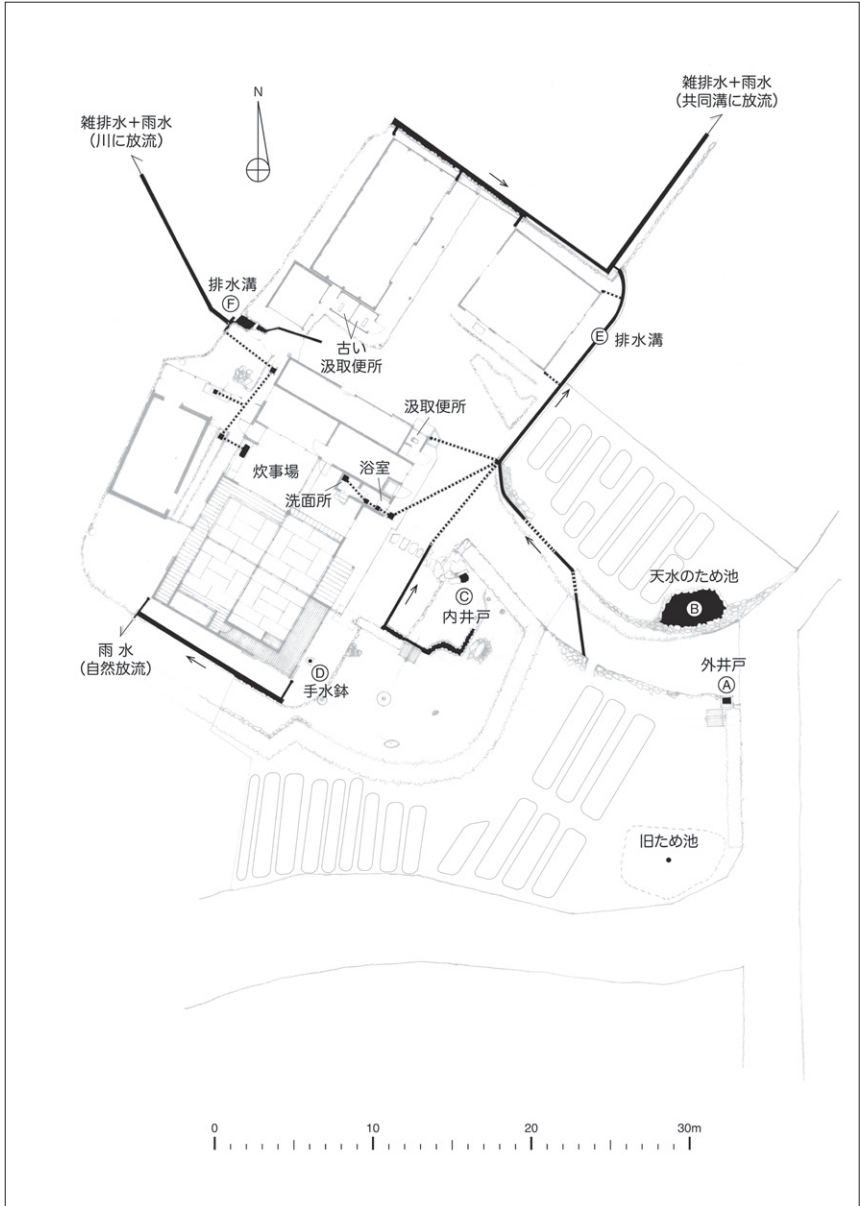


図6：西村家における水利用図

完備して、生活用水は琵琶湖から供給するようになった。

三二二 井戸

西村家には二つの井戸がある。道路の際、屋敷の入口脇にある井戸は、敷地内の溜池で泥を落とした後の野菜の仕上げ洗いをする場所でもあった。母屋の正面、築山庭園の中にある井戸は、つい最近まで釣瓶で水をくみ上げては飲料水や風呂の水に使っていたが、今では庭木の水やりだけになった。二つの井戸にはそれぞれ寄り添うように祠に納められた地蔵があったが、その後築山庭園の井戸を守る地蔵の方だけが現在の位置に移されている。西村家が深刻な水不足の時代を生き抜くことができたのは、この二つの井戸のおかげだと言う。



屋敷入口の外井戸（畑の水やり用）と地蔵（図6-A）



庭の内井戸（飲み水、風呂、炊事用）（図6-C）

三二三 汚水と生活排水

母屋の東の端にある便所は、昔も今も汲み取り式である。以前は、汲み取った汚物はすべて肥料として敷地内の畑に戻していたが、現在は健康上の理由からやめているという。また、「農具小屋」の南西の壁の外には二つの汲み取り便所が残っているが、現在は使っていない。

土間を改造する前は、現在浴室のある位置に五右衛門風呂があった。当時、この風呂は直接前庭に出られるようになっていたので、目の前の井戸から水を汲んで運ぶには便利だったという。

また、現在「炊事場」になっている北西の壁と風呂場があった南東の壁の真下に、昔は「スイモ」と呼ばれる、水をほかす（捨てて）穴が掘られていた。仕切壁の下には穴が開けられていて、家の中と家の外とがスイモによってつながっている。例えば炊事場で出た生活排水がスイモの中で一杯になると、外から汲み出して便所に運ぶのである。ほかし水は、便所で汲み取った肥料を薄めるのに使ったり、外に撒いたりして再利用したのである。



雨水と雑排水の排水溝（川に放流）（図6-F）



雨水と雑排水の排水溝（共同溝に放流）（図6-E）



庭の築山

三三 植生

三三ー一 築山庭園

道路に面した屋敷地の周囲は庭木も少なく、遠目にも開放的だが、屋敷内には、仰木の民家には珍しい築山庭園がある。この庭園はツバキ、サザンカ、センリョウと杉の混じる青々とした常緑樹の壁によって菜園と隔てられ、聖域としての屋敷地の中にもう一つの聖域を形成している。

築山庭園は屋敷地のほぼ中心に当たり、母屋の主要な二室（「ザシキ」「デ（デイ＝出居）」）に対面している。点在する多様な石の造形物と共に、西村貞子氏のご主人が生前に構想し、植木職人の力を借りて実現したものだ。今は亡き当家の主人の、この庭に寄せた熱い思いが伝わってくる。



図7：西村家における植生図



母屋正面の庭の中心部。左手の石の手前に内井戸がある



悪気封じの石積みと柚子の木(図8-へ)

三三二 聖域をつくる庭木

屋敷地にはヒイラギとナンテンの木が目立つ。築山庭園内にもセンリョウ、ヒイラギ、サカキなどの、古来より聖域としての庭を清浄に保つ役割を担ってきた庭木が目につく。「ザシキ」の上がり口である縁側前の手水鉢^{ちょうすい}の脇には、縁起物のマンリョウ、センリョウが植えられている。

門口にはナンテンが、母屋裏手の屋敷地境界部には、土蔵を挟んでカシ、モチノキ、杉などの高木が北西風を遮るように植えられ、ナンテン、サザンカ、ツツジ、ツバキ、ユズなどの中低木が間を埋める。また母屋の納戸の裏手に当たる裏出口付近は、昔から敷地内を流れる雨水が集まるため、湿気のたまりやすい場所として忌み嫌われていた。そのため、ここには一本の大きなユズの木が植えられ、その根元には悪気封じの石が積み重ねられている。



右手に地藏、奥に弁財天の石柱



築山庭園のセンリョウ

三四 信 仰

三四一 石と庭園

西村家の築山庭園の比較的平坦な正面部には象徴的な石の配置が目につく。正面に向かって左手前、石で縁取られた井戸の背後に建てられた自然石の壁と、右手前の地藏の祠、そして水の守護神である「白龍・白姫弁財天」の名を刻んだ中央奥にある石柱とが、大きな三角形を構成している。

井戸の後ろには、五輪の塔をかたどった三つの石塔が、やはり小さな三角形を構成して配置されている。このうち中央一番奥に当たる「白龍・白姫弁財天」の石柱は、石を敷き詰めた基壇によって一段高いところに置かれ、この一画の中心的存在であることがうかがわれる。毎月一日と十五日になると、庭のサカキの木を切り、この石の祭壇の上に水、塩、線香、蠟燭と共に供える。

また築山庭園の右手、急な斜面の鬱蒼とした庭木の間にも、二つの手造りの石灯籠と二つの自然石の石塔が点在している。この石塔のうちの一つは、仙人の住む浄土の「蓬莱山」をかたどっているという。

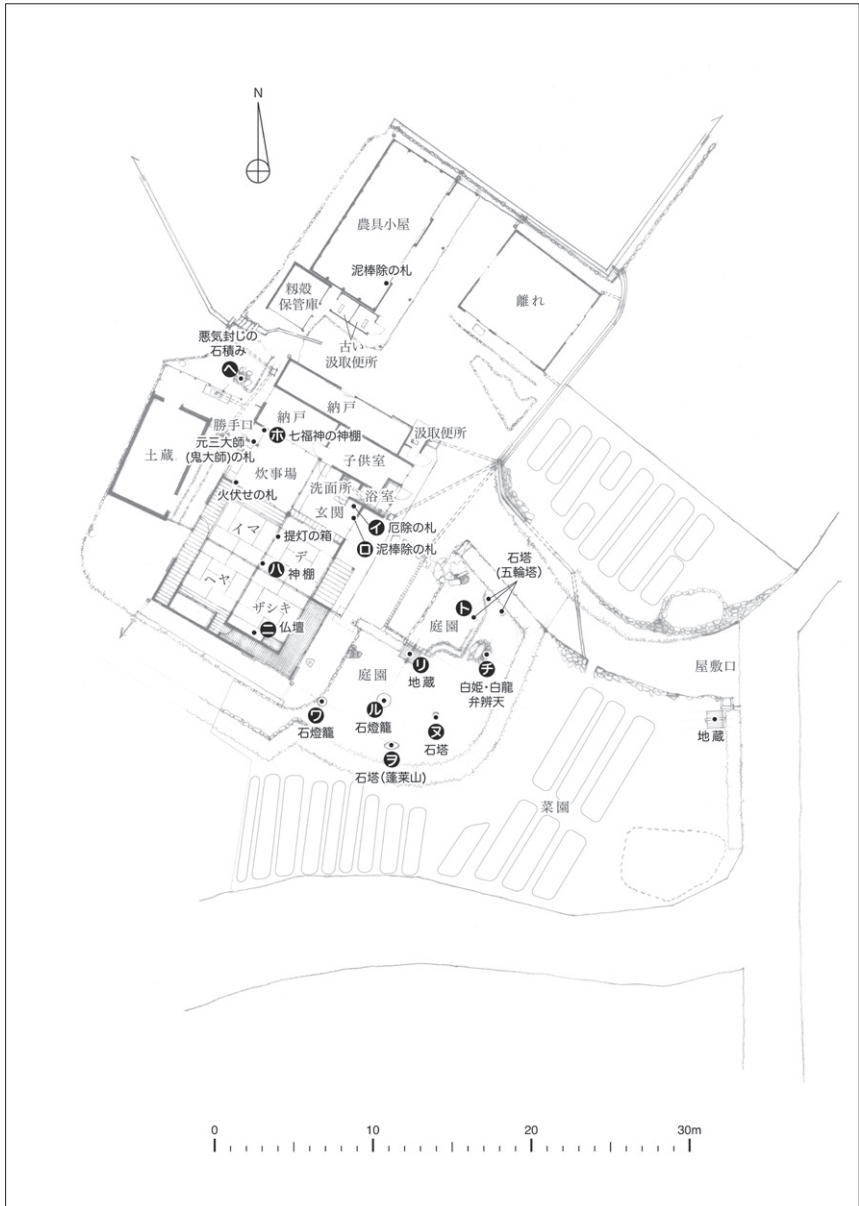


図8：西村家における信仰分布図



「白姫・白龍」を刻んだ弁財天の石柱（龍は水の守護神）（図8-チ）



五輪塔をかたどった石塔群（図8-ト）



石塔（図8-ヌ）



石塔（蓬莱山）（図8-ヲ）



庭の地藏（図8-リ）



石燈籠（図8-ワ）



石燈籠（図8-ル）

三十一 家の神と聖なる部屋

西村家の母屋は北東―南西軸に配置されており、「玄関」と主要な二室は南東の前庭に面している。室内の平面構成は、南西にまとめられた、襖戸と障子戸だけで仕切られた畳敷きの四つの部屋（「ザシキ」「デ」「イマ」「ヘヤ」と、北東に広がる土間によって構成される、いわゆる「田の字型プラン」を原型としている。

高度成長期以降、生活環境の変化に伴い全国的に土間の風景が一変するが、西村家でも土間の一部に徐々に手が加えられ、新たに「炊事場」「子供室」「納戸」が設けられたのである。「炊事場」ができる前の土間には「オクドサン」と呼ばれる煮炊きするための大きな竈があり、火の神を祭っていたという。今も、ガスコンロの上の壁には火伏せの札がある。「炊事場」の裏勝手口脇には元三大師の札が張られ、七福神を納めた神棚にはサカキが供えられている。また、玄関を入ってすぐ右手の壁には泥棒除けと比叡山延暦寺の厄除けの札が張られている。

玄関土間の左手に張り出した縁を介して「デ」に上がると、長押の上には、神棚と祭に使う提灯を並べた棚がある。神棚の中には、比叡山とつながりの深い横川元三大師や覚性律師の札を始め、天照大神等の札と小さな木彫の神様が納められ、サカキが供えられている。

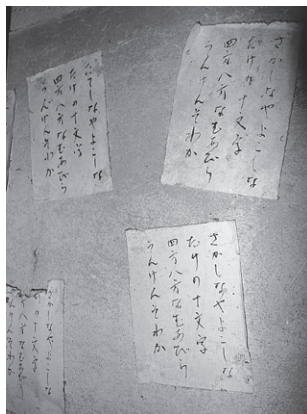
「デ」の奥には「ザシキ」があり、床の間と、天台宗の阿

弥陀仏を安置した仏壇とが、玄関のある土間の方を向いている。中でも「ザシキ」は最も神聖な部屋であり、「デ」とその奥の「ザシキ」の二室は、家の儀礼や接客のための特別な部屋として機能している。葬儀の際には「ザシキ」の南東の縁側が、僧侶の出入りと出棺のための通路となる。縁側下に置かれた石の手水鉢は、僧侶が「ザシキ」に上がる前に手を清めるためのものである。



寺の僧侶が手を清める手水鉢と、出棺のための縁側(図6-D)





泥棒除の札（玄関）（図8-ロ）



厄除の札（玄関）（図8-イ）



神棚に安置されている札（図8-ハ）



神棚（デ）（図8-ハ）



七福神の神棚（炊事場勝手口）（図8-ホ）



仏壇の阿弥陀仏（ザシキ）（図8-ニ）



デからザシキを見る



火伏せ（防火）の意をこめて書かれた母屋妻側の「水」の文字

三五 結び

今回の調査は、仰木でも比較的古い住居形態をとどめる民家を選び、水利用、植生、信仰のそれぞれのカテゴリーについて行ったが、そのどれもが水を中心に互いに分かち難く結びつきながら、住居のコスモロジーを形成していることがわかった。西村家の庭は、いわゆる名園ではない、ごく普通の庶民の庭である。だがこの庭の植栽景観をみると、その大部分が室町以来の回遊式庭園や江戸期の武家庭園、茶庭と共通の植物的水源である日本の照葉樹林的風土に根ざした植生によって構成されていることがわかる。

またわが国の住居配置には、古来より鬼門・裏鬼門に象徴される「不浄」なる領域や、門口、玄関、便所などの位置に対する強いこだわりがあり、特にナンテンやヒイラギなどの植物はこれらの場所や領域と分かち難く結びつき、魔除けの庭木として、屋敷地を「清浄」な状態へと変換するための役割を担っていたものと思われる。

また古来より、大きな石や特に目立つ形をした石は、自然界の神々を呼び込んでその内に宿す「依代^{よりしろ}」であった。アニミズムと仏教的浄土思想とが混然一体となったこの築山庭園には、庭木と石を共に依代とする「楽園」としての死後の世界が象徴的に表現されていて、さながら水をめぐる祈りの楽園のようである。

このように、住居とは水や土地の記憶、家族や死者の記憶と

重層的につながった、豊かな表現世界でもあったのである。仰木の暮らしは、「中心（コスモロジー）」を喪失した今日の私たちの住文化の「貧しさ」と、大地（自然）から切り離された私たち自身の姿を浮き彫りにしている。

謝辞

二〇一〇年度近江学研究「里山と水と暮らし」第一期の共同研究者であり、本学近江学研究所研究員でもある永江弘之氏と加藤賢治氏には、本研究における学生への指導、研究活動へのサポート、研究の記録撮影等のご協力と心強い励ましをいただいた。また、本稿内にも記載した仰木在住の調査協力者の皆様には、調査地に関する情報提供や学生への対応等に多大なご協力をいただいた上、調査を温かく見守っていただいた。また本稿において谷本研氏（本学情報メディアセンター）にはご無理をお願いし、調査成果である図版データの編集をしていただいた。ここに感謝の意を表する。

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第1号

発行日 平成24年3月19日

発行者 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2012
ISSN 2186-6937